

## 考え方

3 「たぬきをつかまえないうちから、毛皮を売ってもうける計算をする」、4 は「月夜で道が明るいのに、ちようちんをともす」ということに由来します。

4 ①は「他人のことにいそがしく、自分のことに手が回らないこと」、②は「待ってれば、幸運はいつかやってくる」ということ、③は「悪いことが重なって起ころること」を表します。

5 ③の「山椒は小つづぶでもぴりりとからい」は、「体が小さくても、気が強く能力も優れてる」という意味です。一方、「うどの大木」は、「体が大きいだけで、何の役にも立たない人のこと」を表します。ウドという植物は、高く生長しますが、食用にならなくなり、くきもやわらかくて使い道がないということに由来します。

## 答え

- 1 ①ごころ ②かえる ③ことは
- 2 ①a失敗 b成功 ②a短し b長し
- 3 ①仏・ウ ②戸・ア ③皮・エ ④夜・イ
- 4 ①ア・キ ②ウ・ク ③エ・カ ④イ・オ
- 5 ①上手・イ ②たか・ウ ③小・エ ④筆・ア

## 考え方

1 ①昔、蛇を早くかき上げる競争をしたとき、早くできた人が得意になり、足をかき加えたために、蛇ではないと言われて負けてしまったという話があります。

2 ②「他山の石」を、誤って「他人のよい言動を自分の手本にする」ととらえないように注意しましょう。③「虎児」は「虎児」とも書きます。④「大器」は「大きな器」、「晩成」は「おそくてきあがる」。大きな器は容易にはできあがらないとして、器を人物にたとえた話です。一方、「せんだんは双葉よりかんばし」の「せんだん」は植物の名前。芽を出したばかりの双葉のころから、すでによいかおりがする（かんばしい）ことから、「優れた人物は、幼いころから優れている」ということを表します。

3 ④「杞憂」は、昔、杞の国の人が、天がくずれて落ちてくるのではないかと憂えて（心配して）、夜もねむれず食事ものどを通らなかつたという話があります。

## 答え

- 1 ①オ ②ア ③ウ ④キ ⑤カ
- 2 ①イ ②ウ ③オ ④ア ⑤エ
- 3 ①ウ・え ②ア・い ③エ・う ④イ・あ

## 4

### 文の組み立て ①

#### 考え方

- 1 のように、助詞「こそ」がついて主語になることもありま  
す。3 は重文です。4 は文の語順が入れかわっています。「君  
の目から大つぶのなみだが、次から次へと落ちる。」というふ  
つうの語順に直すと、主語と述語をつかみやすいでしょう。
- 2 1 とイは単文、2 とウは重文、3 とアは複文です。

#### 答え

- 1 私の姉の将来の夢は幼いころからずっと同じだ。  
2 かれこそ私たちのチームの代表にふさわしい。  
3 父は母と早朝からゴルフに出かけ、ぼくは友人と遊ぶ。  
4 次から次へと落ちる、君の目から大つぶのなみだが。  
5 日曜日の午後、やわらかな自然の光が、私の部屋をや  
さしく包む。
- 1 (主語) ウ (述語) ケ / (主語) カ (述語) キ  
2 (主語) イ (述語) エ / (主語) オ (述語) ケ  
3 (主語) ア (述語) ウ / (主語) エ (述語) ク  
(主語) オ (述語) カ (順不同)
- 1 ウ 2 ア 3 イ  
1 イ 2 ウ 3 ア

## 5

### 文の組み立て ②

#### 考え方

- 1 修飾語と被修飾語をつなげて読み、意味が通るかを確か  
めましょう。
- 2 1 「子どもに」は「教える」を修飾しています。「教える」  
は動詞(用言)なので、「子どもに」は連用修飾語です。2 「日  
本人の」は「食生活」を、3 「資料の」は「活用方法」を  
修飾しています。「食生活」「活用方法」は名詞(体言)です。よっ  
て、「日本人の」「資料の」は連体修飾語です。
- 3 修飾語は一つとは限りません。3 キ「私は」は、主語であり  
修飾語ではないので注意が必要です。
- 4 1 「かわいいパンダは」↓「人気者だ。」／「近所の動物園の」  
↓「人気者だ。」のような関係になっています。これにあう図  
を探しましょう。

#### 答え

- 1 ア 2 エ  
1 いだく 2 映画を  
1 イ 2 ア 3 ア  
1 イ・エ・オ 2 ウ・カ 3 カ・コ (順不同)  
1 ア 2 イ 3 ウ

## 考え方

3 名詞は活用のない自立語です。終止形(言い切りの形)に直したとき、「ウ段」の音で終わるものは動詞、「い」で終わるものは形容詞、「だ」で終わるものは形容動詞です。

4 自立語で活用のある単語とは、動詞・形容詞・形容動詞のことです。「借り(て)」は「借りる」、「読ん(だ)」は「読む」、「紹介(た)」は「紹介する」という動詞が活用したものです。「不思議な」は形容動詞「不思議だ」の連体形、「おもしろかつ(た)」は形容詞「おもしろい」の連用形です。

5 ①のイは形容動詞、②のアは名詞です。③のアは動詞「呼ぶ」の連用形+助動詞「た(だ)」、ウは名詞「自転車」+助動詞「た」です。ここではア・ウが、形容動詞の活用をしないことから除外できます。助動詞は「23 品詞③」で学習します。

## 答え

- 1 1 買った 2 くやしがる 3 立派に  
 2 1 来る 2 正しい 3 がんばる  
 (順に) ア・イ・エ・イ・エ・ア・ウ・ア・ウ・イ  
 4 この図書館で借りて読んだ不思議な物語の本がともおもしろかつたので、友達にも紹介した。

- 5 1 ア 2 イ 3 イ

## 考え方

1 副詞は、①③のように主に用言(動詞・形容詞・形容動詞)を修飾して、連用修飾語になることが多くありますが、④のように体言を修飾して、連体修飾語になることもあります。

2 「もつと」は「ゆっくり」を修飾しています。このように、副詞が副詞を修飾することもあります。③「ザーザー」のような擬声語(擬音語)も副詞です。

3 ①は「願望」、②は「疑問」、③は「打ち消し」、④は「仮定」、⑤は「推量」と呼応する副詞があてはまります。

4 ①「まさか」は「打ち消しの推量」の言葉と呼応します。「ま」は「くないだろう」という意味を表す言葉です。②「まるで」は「たとえ」を表す言葉と呼応します。

## 答え

- 1 1 学校から帰ると、すぐに犬の散歩に出かけた。  
 2 それはたいそう寒い朝で、雪がちらついていた。  
 3 地方の町だが、いつもその商店街はにぎやかだ。  
 4 ずいぶん昔のできごとだが、ぜひ聞いてください。  
 2 1 とても 2 もつと・ゆっくり(順不同)  
 3 仮に・ザーザー(順不同)  
 4 1 エ 2 ア 3 ウ 4 オ 5 イ  
 1 まい 2 ような

## 考え方

1 美沙がおかれている状況じょうきょうを読み取ったうえで、比喩ひよの意味を考えていきましよう。美沙は「みんなが簡単にできる」色ぬりができないことを健二に指摘してきされ、みんなの視線を集めていきます。「火」には赤くて熱いイメージがあります。このような中で、体が「火」のようにほてっているのですから、これは美沙のほずかしい気持ちきもちが表れていると読み取れます。

2 「その調子じゃあ、日が暮れちまうよな」という健二の「いつものような乱暴な言い方」を耳にして、美沙は「健二はいつもそうだ」と思います。そこで思い出すのは「おこったように」久美のゴミぶくろをかつさらっていく健二の姿すがたでした。「今までの」健二は、人の弱点を大声で指摘する乱暴な存在そんざいだったのです。ところが健二が「色のうすいところだけぬっていけば？」と提案したとき、ふと美沙は健二の優しさやさに気づきます。ひよっとしたら今までも不器用な自分や弱い人のことをかばってくれていたのかもしれない、と今までとちがう目で健二を見返してみたのです。美沙の心情の変化を読み取れる場面です。

## 答え

- 1 はずかしさで、体が熱くなったということ。  
 2 健二のことを乱暴な男の子だと思っていたが、実は優しい人なのかもしれない、という見方。

物語が進んでいくなかで、登場人物の気持ちがどう変化していくかを読み取ることが大切だよ。



## 考え方

- 1 説明の部分に「小僧こぞうさんは、たなの上にあるものがおいしいものであると気づいていたのでしよう」とあることから考えます。「ばや」は、「……したい」という意味の言葉です。
- 2 外出前にお坊ぼうさんが「これは人の食ひつれば死ぬる物ぞ（食べたら死ぬぞ）」と言ったのは、小僧さんに食べさせないためです。これが「うそ」ですね。
- 3 小僧さんは、大切な水がめを割ってしまったので「生きていてもしかたないと思って、食べたらずぬと言われたものをたくさん食べたが死なない」と言い訳わけしました。これはもちろんうそです。お坊さんのうそを逆手にとつてしかられないようにしたということですね。
- 4 3の説明も参考にしてください。大切な水がめを割ってしまったので、死んでおわびをしようと思ひ、お坊さんから「食べたらずぬぞ」と言われたもの（水あめ）をたくさん食べたのに死なないので、と言ったのです。
- 5 「さんざんな目」とは「ひどい目」ということです。お坊さんが、水あめは食べられ、大切な水がめは割られてしまったことですね。

## 答え

- 1 ウ  
2 これは人の食ひつれば死ぬる物ぞ（15字）

- 3 エ  
4 ア

- 5 水あめを食べられてしまっただけでなく、自分のうそが原因で、大切にしてきた水がめも割られてしまったこと。

## 【古文の部分の訳】

- A 「これは人が食べると死んでしまうものだぞ」と言ったのを、この小僧は、ああ食べたい食べたいと思ったので、お坊さんが外出したあいだに、たなから取つておろしたときに、こぼして、着物にも髪かみにもつけてしまった。ひごろからほしと思つていたので、二、三杯十分に食べて、お坊さんが大切にしている水がめを、石に打ちあてて、こわしておいた。

- B お坊さんが帰ってみると、この小僧がさめざめと泣いている。「どうして泣いているのだ」ときくと、「大切な御水おんみづがめを、まちがって割つてしまいましたので、どのようなおしかりがあるだろうかと、残念に思つて、生きていてもしかたがないと思つて、人が食べたらずぬとおっしゃられました物を、一杯食べたけれども死なず、二、三杯食べてみましたけれどももいっこうに死にません。ついには着物につけて、髪にもつけたりましたが、いまだに死にません」と言った。